

わたくしの印王ジハード戦

◎◎女性が働くということ◎◎

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

79

医師万能という幻想

最近気になるCMがいくつもある。どれも、商品の紹介後に「○○のとよう」のせりふで締めくる内容だ。「医師」ではなく、「かかりつけ医」とか「お医者さん」と表現するものもある。

商品とは、つまりは健康に関するものなのだから、当然健康にまつわる心配事は医師にお任せしましようというあたり、一見当たり前のようだが、これが私には引っかかるのだ。

頻繁に報道されるように、現在日本の医療は危機感にあふれている。主人手不足や医療費について、これといった抜本

的解決策もなく、現場は

日々追われるようになり進している。国では、医療費の伸びを抑えるために、個々人が「病院にかかるないようにする」

ことがもつとも早く効果を実感できる。病院での治療が遅れると、そのぶんがツケとなり、結局病状が悪化し医療費が高騰する、などの現象はある程度避けられないにしろ、

医療費としてコストが発生する場を減らす方法は、重箱のスミをつつくような診療報酬の点数操作よりも、はるかに大きなコストパフォーマンスや波及効果が得られるだろう。

しかし、なぜかこのC

Mは、まだその状態にいる、と安易に繰り返す。病院へ行けば、医師に相談すればそれだけ医療費に反映することを承知の上で勧奨だろうか。また、医師は何の相談でも乗れると本気で信じているのだろうか。

に報道された「メタボリック症候群」も同じ。



「自分の健康は自分で守ろう」とか「セルフ・メディケーション」を推奨する主張とは明らかに相反するキヤッコ。トパフォーマンスや波及であり、これではどうしたらいいか迷いが生じてしまう。

昨年あたりからしきり

タボ、すなわち内臓脂肪は、運動や食生活を少し意識することとで数値に反映する生活習慣病の代表格である。自分で努力し、重篤な病気を予防できれば、医療費の削減に大いに貢献する期待があつたはずだが、その姿に「美学」は感じられない。病気を以上にうろたえる。残念ぼう弱い。すぐ気弱にいかんせん病気にはめつぱう弱い。すぐ気弱に

これだけ知識レベルの高い国民性のはずなのに、どう弱い。すぐ気弱にいかんせん病気にはめつけられても「自分らしく、どんな過酷な状態に置かれても「自分らしさ」を保てるような人間であり続けること」。そんな「生きる大原則」がますます難しくなつていくようで、「医師に相談しよう」と繰り返すテレビが妙に気味悪く耳に残るのである。

健康のことすべて医師に託し、寝つきりになつても医師の訪問を待ちうに、その背中に手を合わせる高齢者の姿を見る。わび、まるで神を見るよ

院が「メタボ外来」をつくり、数値が少し基準値から外れているだけで薬を処方し、完全に患者として位置づけられてしまつた。これでは、医療費はさらに上昇し、無駄な治療がかえつて健康体を